



2898
4
13



門へ 13
2898
4

文三平氏七月に江戸着

狂母之門

近世 雲晴間雙王傳第一集卷之四
新話

東藩 宮田南北編次

昭和九年七月四日

長喜 門 定 尾 金 四

第七回

狂歌と遺一と宇薙因縁と告白
閨門と乱一と七草春情と恋

再説も較倉行龍のまゝ賊婦が死尸と土と穿く深く埋め四下と見ふ大地の上ふ沙の書一哥ありたり。こゝ先ふ宇薙が書一わゝとも那何刻ふ恁あせしぞ。那木訥け女流あるふ艶くも三十一文字と。つゝ一夏の面白やと立寄見れば其狂哥ふ亡魂やまぐ行もせむ刀祢川ふ浮て来り眼魚哉行竜且くうちあんど。眼魚は上野ある。刀祢川より出る鱧の文珠

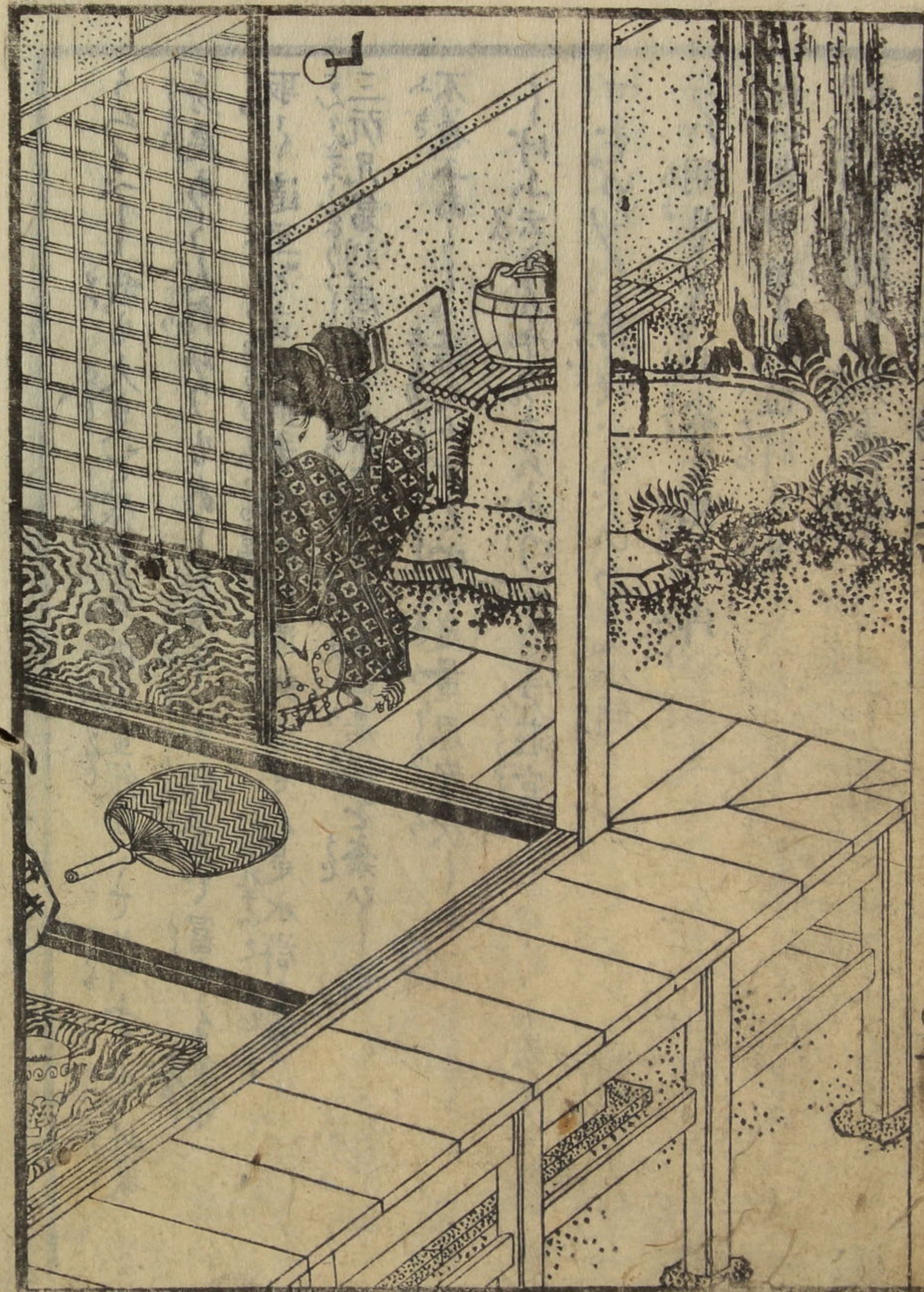
又五傳卷之四

山利根より源出て、（中略）狂歌の心とり、知らば、那の鱷の再來あり。
 下より東川と遇ありし、
 あのもへ、其名さへ、宇羅と喚も自ら。因然、這是、小明彰あり。那
 奴白地、此由と告ず、て去り、れども。狂哥と遺し、て某み。
 悟て見よ、の心あり。這是、と見し時、後后、み至らむ。
 其用、立夏疑ひあり、ん、又、名刀の土中、みあり。久つ、
 中、有し、も、考へ、其謂あり。それ、瑞石と云り、の、原、是、土の塊也。
 其土、數百年と經る時、凝て、必、
 千代、
 刀と埋し、時、土あり、年月、經、終、
 とも、
 今、此、瑞石、も、名、

て、大豆の、石、接、
 へ、
 と、
 も、
 云、
 趣、
 回、
 又、

とや。愁場たごとと洞査せり。それふ付く汝今孤独とあへて
立ちし。煙と細ふ立んより。まづ其家と拿納予が宅ふ来るべし。
我力を盡して。餘方が廿四五ふ成迄ハ小願とあへて。育やん是
即古の周々文王の心あり。孀寡孤独ふ恵といふ予が心中のゆりこ
くみ。成去行し。妻藤波へ追善とこそ思へあり。且又成成長しそ
家と續べき時ふ至らん。我半世の力と出して。そが貢と成と欲を
此美や如何と問うれば。行龍ハ心の内大ふ不審り思ふや。太平
二ハ邪共憤婪其首落ふ至るも。人と恵べき者ふあらず。是必ず
心中ふ深きこの有るも。あへん秋。非除太平二謀計と構へ吾と謙
まとも。何やどの夏あへん。那が来れと云と幸ひ。明日より這里り

うつるべし。我も大夏と懐く身の上金銀あてハ叶ふまじ。此家小育
身處あへん。けりもあへん。太平二が邪貪で富める金銀と棄ひ
取し。這里と立退。武者修行の道纏とせん。是水滸小呉用公孫勝屍蓋
三阮兄弟劉唐等が。蔡太師の誕辰の嘉儀と棄ひ。如く。不義ふ似く
不義ふあへん。恁々々と心ふ定量。思案決して頭とりけ。最嬉
しげふ云うや。あへり。さき莊官さぬの仰ふあへん。辞め
せむ。いよ。其義ふちがひあり。小願とあへて召おられ下されし
らハ明日より。私宅と納し。御當家へ送り。やさん併あへん。いよ
母の喪中あへん。位牌も共ふ持参して。祭り。こをいし。云へ
太平二点頭。其義ハ餘が心小任し。いよ。明日送り。て。絆



精細と談し聞せられ。紫宅二郎。轉頭して恩と射し。直々
家へ立入り。更遣りあり。拿納め。其翌日終小岳曾古許近
抑太平二何の故とゆ。斯紫宅二郎と家へ引取り。恩と見せ
惠と垂く。那が心と結ぶと問ふ別所家と云へ原赤松の別家建
武の後醍醐帝延元上の頃より赤松家の別所より。扈從は面々
多しといふも。憂美の者の一箇もあり。長則朝臣の心ふかあり
ど元より明智の君あり。酒色小溺も給はざれば。さして美人茂
好きたまふも。さきにも蒲上大學。如何ふりて長則朝臣茂酒
色の道へ引入んと。曩より岳曾古太平二と欺き其娘異姓と己が姪
と云うる足利家へ献らんと云ふ詭計。實に国守へ献上せんと

思へり。又そが親あり。太平二へ密入人を忍して殺し。さきより
後の崇へ無もの心ふ。又今一名美少年と撰。是と異
つうて長則朝臣へ献らば。如何ふ明智の人あり。酒色小溺
れざる更あり。心の内ふ飽ま。邪智と云ふ巧んで岳曾
古より美少年でも足下の下下。有更あり。某へ知らせよと辞巧
み。頼置ふ太平二の畏り。夫より専ら心とつて。美少年
と求む。いまだ一箇も見あり。曩より別者帳改の
紫宅二郎と一目見。忽地心ふ是こそ日頃尋る美少年。此者と
大學へ献らば己が功とあり。更あり。人の心の内ふ早くも思ひ
く。慈悲と見ず。己が家へ既ふ引入人と云ふ。今日紫宅二

郎と招き寄て。夏悠々と云聞と云那早速ふ兼知しければ太平二
大ふいづ喜ひ家内の者へも云傳へ明日ハ曾寧村ある。紫宅二郎と
云者我家へ小圃ふ來る間。俗達此夏心得つるや。譚り閑せし其
夜ハ各戸入ふる。其翌日紫宅二郎家財と納。ちりと。
太平二許へど迂りる。太平二此夏と急ふハ蒲上ふ吉も知らさず。
心の内ふゆくと紫宅二郎ふ恩と見せ置其後ふ献らば。后ふ至りて。
吾為ふ成りやせんと客人のどくあし。ちと。ねと日數を送
りたる。既ち藤波が四十九日の喪も果ると。品曾古太平二助
盛ハ年既ふ六十旬や。再後妻と迎へる。是ハ豊地村ある。浮雲や
富作と云者の妹や。七草と喚名す者あり。叔又這七草め

素性より尋ふ。そが兄ある富作ハ元ハ最貪し。そのものあり。
一時浪花の富と入る。千両の百番と拿り。又其后も入る。引續て
三回ふど。夫より好運次第ふ尊あり。田地田園數多求る。いもうと十
年計りや。近郷の富家とあり。七草ハ元より。花姿人
小勝と云ふ十六歳の時兵庫の富家あり。檜垣屋の船十郎と云
者の方へ嫁入りて。今一箇の男子と設け。其子既ふ十五歳其名と
緝五郎と喚名せり。七草今茲二十五あり。其心最浮薄。
して平日ふ紅粉と厚く塗風流と好く。柳巷の陽花と手本と
なり。衣服帶等ハ云ふや。頭のうさへ。至る迄最負俳優
め紋とつけ。當時流行の東西と云ふ。云バ金銀と厭む。買求め。毎日ふ

新ある魚肉と調へ酒ふ溺れく前後と忘れ。後ある妓女舞兒と招
く。踊り舞して樂とせり。然るふ又七草ハ其家の後生。叔次郎と
云。艶治郎と蜜夫。后ハ酒宴の場へ招き。酒の對手となく。最
艶媚く有様ハ赤き襟裡とむき出し。扇子と使ふ。叔次郎の
膝ふもれ。乱酔狂吞一方あらず。其夫ある船十郎ハ最寛仁ハ男
あはれ。今ハ余所目ふ見る。夏と得せむ。叔次郎も家と出。七
草ハ親元ある。富作許へて戻。この這回媒の合結ふ。婿
姻既ハ調へ。太平ニが妻ハ迎へ。又兵庫ある。檜垣屋船十郎方
ハ再妻と設。家益々富栄へ。悠々陽花の七草あね。さ
く草深き。田舎ハ東西ハ不自由。不足ハ思ふ。さ上ハ太

平ニハ又白髪の人あり。諸支障々と言少く。七草ハ心ハ
仕も。夏と。態懃ある。行跡多。さく。壁と隣りて。蜜
語と閑。も本意ハ思。日と送り。心の内ハ深
く。太平ニが奸。折目平きとき。い世と物。び。思
つ。思ハ。誰ハ。由と捨。小舟の船。あ。今
更ハ心。間。思。隙。あ。既ハ五月霖。雨
竹。其も。鷹。始。執手。孟。夏。あ。なり。ふ。太平ニ。今ハ時
て。よう。人。さ。三木へ。出仕。て。浦上。み。見。へ。紫。宅。二。郎。が。由。と
告。人。と。思。ひ。ふ。多。れ。ハ。妻。七。草。ハ。對。して。云。よう。我。ハ。今。日。より。三。木。へ。至
て。殿。の。御。用。と。兼。り。明。後。ハ。帰。る。は。さ。上。ハ。何。那。の。談。も

魚あさふあゝゝゝバ歸かへらん日ひハ明後日あさうてとふ計もろりがゝゝゝ。此儀このぎとハ

第八回

残臭と歎いて
霊魂處女ふ説く
名壁と感いて
詔命播陽ふ下る

紹落^{これ}齡^が再^{また}說^を 岳^{つと}曾^そ古^こ太^う平^{へい}二^にが愛^ま女^をあり 異^よ女^めの人間^{にんげん}ありぬ 鯛^{うなぎ}
 蛇^{へび}の雌^めの再^{また}来^きありとて練^{あや}はざれども 隠^{ひそ}行^{ぎやう}の術^{じゆつ}ありありとて因^よて
 衆^{しゆ}賊^{ぞく}とてとて一^{いつ} 刺^さへ鯨^{くじら}に儒^{にう}九^く郎^{らう}と属^{ぞく}下^げとありとて二^{ふた}八^{はち}未^み
 満^{みづみ}の弱^{じやく}女^{にょ}ありと似^につとてとてこれぞ人^{ひと}余^あわども異^よ女^めの戀^{こひ}亦^{また}
 山^{やま}と踏^{ふみ}とけり。摩^ま耶^や山^{さん}ふよとて登^{のぼ}り。人^{ひと}跡^{あと}絶^たとて富^ふ洞^{どう}ふとけり。

自心と練り術と腕ん。居るく大十許日その食する所
 ハ或の果ある草の根う。女仙ふ舞一々行ひすは一時ハ武
 とあ。又ハ書あび讀誦して張角が跡と追ひ明唐
 賽兒が行ひと慕う毒と未代ふ流さんとする。実ふ妖蛇の質
 かろく。この嵩洞の形勢と謂ハ南面の巨洞うて廣
 きま七八坪あり常ふ水気青岩の苔とけんで露ハ頂上より玉色
 て降そき尾上の雲ハ喬木ふ班して落葉さうまに踊るなり
 りハ深山の奥かまじも蛇蝎の性たる異かまじ猛獸惡夷も近附
 莫あらず最大胆うも居るなり。一日巽ハ深谷ふ下り洞水の
 流るくと汲かんとして件の窟を立出つ行人とあなる跡辺より

やよと喚けり。一人の婦人現れ出たり。這人年齢五十許
と見え面色青白くして。全体憔悴し。髪は剃のてくくして
這界の人と見え。見へざりたり。潜然と涙と流し。張然と
立者あり。異の意訝り。什麼這深山の人跡絶つ。鳥もかよ
ぬ。山々々々。何人あまた隠れ居て。俺這仙居の障りとあや
意憎かり。緯々々々。あつとつと。仇と見ふに。豈計人
這人ハ母の藤波あり。これハ異のつと。愕き。顔打極め。首成
低て。一會兒の言もつと。さうさう。登時件の藤波ハ。さう落
来る涙を。さうい。さう。あハ。咱侘が女あれども。今ハ仇とも敵
とも。恨甲斐あまて。あが。開惡念と翻し。人間界ハ生れ

くる幸と思ふ。前生の執念意改め。爺即ハ孝と盡され
あハ。畜生道の苦と脱して。永く人界ハ生と得。あハ。毒蛇惡蝎
の怨念。さう。あハ。身ハ命と果せ。あれど。千万名の命ハ。さう
て。死。さう。あハ。今ハ。さう。と。一点も恨ハ。あハ。情あまや。和女
郎。あハ。さう。さう。心あり。さう。めと云へ。俺伎の格牆あり。心
よう。起りたり。さう。さう。更あが。あハ。身と腹ハ。懷せ。さう。
十月が内のうき。思ひ生を。落。さう。其日。さう。あハ。れ。目出。さう。
成長。さう。と。帝掌中の壁と愛。月とあが。さう。二ハの春と。あ
さう。さう。春秋の孝。さう。い。才。さう。い。生を。立。さう。さう。さう。
さハ。百千名ハ。越。さう。さう。世ハ。亦得。さう。さう。弱女。さう。さう。思ひ。

あり。ようて人界に長住して。世にありの人と交り。富家の妻女と結ぶまじ。又只汝が伏とあるもの當国一名ある。是又因果の人とて。汝が前生の伏ありき。今宵ようして。汝が師とあり。怪しき術と武の道と。委しく訓へやう。欲と心得るや。示諭して。開夜うして。幾夜とあく。現と来りて。咱侘が為に諸術の師とてあり。わう。も亦術中の術あり。俺の左道と武の業に長くと云。知る者へ。終に一名もある。結ぶ。且俺師とせ。那老翁ハ則咱侘が前生と。父とあり。老蛇あり。亦這巨窟ハ那老蛇の棲栖とせ。れ。所あり。見。咱侘が這所へ登。来りて。

住て。武藝の器物遺あり。ある。皆老翁の送物あり。此も。人界に交り。住。交易のね。思ひ。究め。這山に登り。前生う。咱侘們夫婦が命と縮め。仇と。人。怨と。做人と思へ。あり。害悲し。母刀自。憂目と。見。泰。罪深う。夥多の人を救う。と。蛇蝎の謀と。世に。即時に命と。失ひ。非業に。似。れ。前世の深き因縁。人。件の如き。け。あり。つ。と。諫。や。仲。随。て。難。然。あ。咱侘。這山中。遠。出。んと。欲。意。非。除。江湖上。不。從。横。して。一回四海と。覆。共。人民の命。害。是。母刀自。過去未來の善行功德と。感。得。て。幼。

養まらる。育の恩ふ答ふところあり。いざ去る人俺心術の障とあらん
その時へ却て恩義と破るの理あり。ゆゑと坐とユウ。洞の
流しとあらう。行んとする藤浪へ逮て袂と引止。あは情け
執念かゝらずや。待よ待よ。咱伴が辭と。あはて。引あはるや
悲しひか。あは叫び嘆母の真の異女が骨碎る悲歎の哀傷。十六年の
春秋ふ受や。恩の摩耶山の峯より高く待る。あは。息まて。意
ゆるけ。今ふ信ん。冥土より。形と現。惡念と。めえせ。宜
御心の。大慈大悲の御恵。尊や。んや。恐や。んや。実の人。性。人間や。
ハ朝か。夕か。ふ。おん。膝。もと。と。立。去。も。せ。で。及。む。ん。ど。け。の。孝。も。
盡。一。恩。も。報。ひ。忠。孝。義。烈。の。夫。と。設。は。初。孫。の。御。顔。と。見。せ。奉。ら。

父母の。い。い。い。御。悦。の。仰。と。司。べ。か。り。く。お。嬉。し。か。ん。ふ。浅。間。や。天
ふも。地。も。易。か。う。父。と。母。ふ。惡。名。と。き。せ。奉。る。の。こ。ろ。す。這。世。う
かる。畜。生。道。の。歎。き。と。わけ。命。中。で。果。さ。せ。る。ふ。ん。い。い。は。ん。
い。で。胸。ふ。堪。ぞ。う。ん。非。因。と。思。ひ。諦。めて。不。孝。い。や。う。い。は。り。
と。う。と。歎。て。打。伏。ば。藤。浪。へ。む。せ。う。う。それ。わ。と。近。ふ。世。の。義。理。と
知。く。御。身。が。情。め。や。大。善。心。ふ。立。う。う。う。絆。の。か。あ。る。ね。や。同。心。見
の。甚。し。う。浅。う。い。う。ふ。悲。し。い。か。と。傳。ひ。て。嘆。伏。し。て。叫。び。善。小。進
一。藤。浪。が。美。心。の。程。あ。て。哀。あ。り。開。時。も。後。の。方。も。と。う。と。さ。る
人。と。あ。り。是。則。別。人。か。う。ず。異。う。師。と。せ。老。翁。あ。り。那。老。翁。ら。藤
浪。と。異。女。が。悲。歎。を。同。て。大。夏。の。邪。広。あ。と。匹。婦。藤。浪。執。魂。あ。は。浮。も。

やう。這里ふ来りて妨あそや。いぞ退けられんぞと云つ利劍
とす。と後持眼を閉て念呪をねば。藤波倉卒ふ五体と苦め風の
霞と拂ふ。忽ち消て失ふ。開時光翁四下と見廻しあそ
笑て異ふ向ひ妨あそ。藤波へ俺幻術して追退け。和女郎未ど
知とやあそ。去月三木殿より。列卒と向て天神山とあつ。然
駐雄の大蛇が頭あり。神変不測の名玉へ今三木殿ふ納し。那玉と略
奪して汝が懷中ふ所持あそ。大望成就の助力とあそ。然と共
那玉と掌ふ人。と容易あそ。俺今汝ふ機密と教へと思へ。天機と
あそ。の怨めあれば仔細告ぐ。と遠く。と那名玉必と掌ふ人
折あそ。開時ふ。同因果の汝が伏ふ遇あそ。あそ。疑ふ事

あつ。それ。付て用金の。いへ。と変あそ。その金銀は汝が仮ふ
父とせ。嵩曾古許て畧奪と。渠へ貪婪妄欲の者あて。非道の富ふ
栄え。遠く。て開家滅せん。万端意得始終の首尾必ず誤つ。支
か。俺今生て汝あそ。因縁既ふ。因果。自今再回避。折
あそ。と許。云。木の葉ふ傳ふ風ふ。形見。成
あそ。異は始終と打同。感謝。堪と首と。仰ふ。随ひ。ま
併あそ。自今以後。め。身。と。擁護の程と。後と奉。と。數回拜と
あ。蜜ふ山。馳下り。隠行の術とめて。瀧野村ふ。立。嵩曾古許
忍び入。這時。嵩曾古許。太平三木。出府。跡。女。主。の。草
あ。奴婢們。那。這。二十許名家。と。守りて。居。夜。の。又。満

頃盜賊一名忍び入る。是則異女へ小家のものへよく寐つて一名も
知の魚りしる。異女ハ打ち笑ふ。咱倅四海に横横して。數万名の
上ふ立まゝ欲する身の倦る小支不意と配りて。人の宝と畧奪せ
ん。自意不羞る。ひとりごちて。三百金の圓金と拿掠最徐
ふ出んとせしむ。四五六と喚做りしもの。目と覺てあれと見咎る。盜
人と呼られ。異女ハ急ふ傍ある。行燈とせしむと蹴倒せば。燈火消て鳥
羽玉の闇とありしる。四五六は見て盜が綱入る。思ふ。賊ハ女に手
あとの程も思ふ。足らば。叩き倒して。擒やと小家の男女俺とて出てこ
る。中の早苗と喚做る。婢あり。いゝいゝ人。還てまゝ。て。表の方へ逃
出ると。四五六はす。見て。女盜賊ごらん。あれの。し。い。せ。と。手。ご。ら。う。

棒とせしむ。と掉廻し。早苗が首と後より。續けらる。ふ。二十計。か。み
仕して。打ち。られ。或所。や。あ。う。う。人。憐。べ。早苗女ハ。ウ。と。許。ふ。叫。び。も
あ。ま。だ。急。息。絶。え。る。緯。の。騒。ぎ。異。女。ハ。亦。隱。形。の。術。と。て。何。国。も
あ。く。逃。去。る。り。あ。う。う。所。へ。紫。宅。二。郎。も。棒。提。出。来。り。伏。倒。と。り
早苗と手早くも引起して。よく見ると。既。なる。死。果。て。惣。身。都。て。冷
う。う。これ。四五六。ふ。ち。む。ひ。和。郎。大。変。と。引。出。せ。う。這。者。既。自。心。絶。え。見。ら。れ
よ。這。の。盜。賊。は。婢。女。の。早苗。あ。う。う。笑。止。や。と。保。つ。先。速。あ。う。う。と。持。出。て。死。尸。の
や。う。に。指。付。ね。四五六。ハ。保。不。保。て。足。り。す。が。震。る。面。の。色。ハ。さ。あ。ら。土。の
て。い。い。い。い。と。嘆。き。う。う。七。草。ハ。此。物。音。ハ。何。変。や。ん。と。起。来。り。積。重
と。同。ハ。紫。宅。二。郎。有。一。伏。と。物。譚。は。七。草。も。大。驚。き。う。う。せ。が。う。う。う。ん。と。床。

入る折しめあれ太平二猛可ふ夜と云く。三木より帰来りたり。この是
名玉の件つて。三木も変の起し。又後の話やて。先太平二ハ准緯ハ
知らぬ内通まづ七草の出迎ひあが。その吾夫よくと帰らせ給ひし。即苗
主の間ふり。誤る。最大変の出来なり。是見給へと早苗隔室へ伴ひ
入る。太平二ハ早苗が死と見て大に愕き。准細と問へ。紫二ハ二郎の首始
女賊が綱入る次第なり。四五六が誤り。早苗と打殺し。自
十至百。おもしろく演る。太平二も大にあどろ。その安ろ
ぬ大変ふ及べり。つよ。その趣きふ相違あややと。小家のものを
ひるもの。つよ。集へ。銘々ふぎん。銭做し。す。二百金
の黄金が失る。と大に。是あんど。なる。不用意

悠々大事ふ及んど。り。四五六と。糾問する。是
即云ふ。たぐむ。あれ。太平二ハ先四ハ。縄とけ。早苗
ハ備前の西川の産。変甚。蘭乱。わらんと。直一通の訃書と認め
夜ど。人。遣。此由三木へ訴。其後。下知と傳へ。四五六
紫二ハ二郎。番とつ。最き。守らせ置。此隙。三木の
と。七草。話談せん。と。下の人と退け。声。密。云。其
ハ始。蒲上。頼。一件あり。その一名の美少年と撰で。殿
の御扈從。献べき。変。幸。此度。紫二ハ二郎と得。れ。是
ふ上。物。思ひ。此由。と。大學主。と。彼
人喜。打点頭。何。の幸。夫。付。是。首。又。の。変。出。来。せり。

你も豫く知る通り。日外天神山より。殿が得給ひ。大蛇の名
 王いふ。あまの朝廷へ。帝是と敵見あへんと。這回御勅使とて
 比良石中納言治長卿近々御下向あり。殿名王と惜せらひ。つふふ
 一々此更と止やうふ。御家の長臣半と商量ありて。金銀と數
 多賄ひ。密に群給へども。倒に閑入あり。是に因り幸ある哉。その美少
 年の紫雲二郎ふ計と教へ男色とめく。御勅使の心と碇。近付
 よろ名王と棄て。再拿戻させ。盜賊ありと披露せば。更ふへあふ
 相濟へ。尚又問へき一条あり。其紫雲二郎と云者。武藝に覺有
 と問。其答く其義へ未明。み見むとつて。手は知る更り
 あり。覺束あく思ひ。召へ。試み給へと云。こゝに。大
 小点頭く。然

らば。你是より直に歸りて。明日の早々召連
 び。云渡を。是に因り某へ直さる三木と云。歸り來り
 今宵の時宜先此由と紫雲二郎も。云閑に置べ。と。招き寄
 る此言と。詳譚聞うれ。行龍の心の内大に喜び。名王掌へ入時來れ
 りと。心裡の喜大方あり。早束に許容あり。吾濟元來此武道心得
 ひ。文雅の生公家と思はせ。と云。出曾古大に吉。明日へ四五
 六の吉ふつと必と三木へ趣くべ。其時殿に見。武藝の程と見
 せ奉れ。語らね。七草の紫雲二郎と幾久。慰んと思ひ。ふ
 豫ての謀趣大に翻転。心の内。最本意あり。愁憂ふこそ。沈
 さて。其翌日。三木より召狀來り。其趣。出曾古太平二奴隷



秘にありて人を知る



秘にありて人を知る
傳詔命鳳使到播陽
おきめいせつえんくろくしんすあろ
あきりて人を知る

四五八并ふ紫它二郎。太平二が妻七草都る四名。今日中ふ来るべし。明日早朝ふ召出して。吟味と遂べきもの。文体関ふ四五八へ益々恐れとあり。乃るる罪人あり。とて籠ふ乗し。太平二七草是等も轎う。紫它二郎の。歩行し。急ひ。三木へ趣。其日の暮方。既ふ止宿ふ至著あられ。まづ這由と訴へ置ぬ。時ふ天文十七年夏六月廿八日。四人の者と召出し。吟味掛りの諸役官決聽ふ出罪と正し。四五八弥早苗と打殺せしに究り。其它の者ハ罪一統不免せし。其後早苗が横死の由備前の城主浮田和泉守直家が方へ遣し。別所浮田両家より檢僚とち。且死尸押改あり。そふ本国あり親元へ送り遣し。うらふ。

浮田
家
の
臣
あ
し
て
赤
松
家
の
臣
あ
し
て
自
立
せ
り

出され。死罪と逃く佐渡の国へ遠流せし。こ小因。是首ふ述。去やどふ七草ハ。其日ふ瀧野へ。它二郎ふ分解る夏と。最本意あり。思ひたり。此時国守長則朝臣ハ。廣聽ふ出給ひ。家の臣と左右ふ座し。ねね行龍と召出して。其容貌と見給ふ。世より希代まう。ぬ玉も欺く美少年是と見る人毎ふ。殆感ぜざる。い。時ふ長則やき。やよ少年紫它二郎とや。這回勅使御下向ふ。你ふ。付べき。最大切の僚勤あり。此緯首尾や。仕果あ。予が近従ふ取立。勲績と子々孫々長く傳ふ。賞と行人。你ふ。武心ふ意の。あ。け。や。問。行。毫。ろ。ろ。と。云。や。小。可。ハ。元。孤。郊。ふ。育。く。大。と。て。ひ。

て少しもあく。只草と刈土と穿の外不覚へし。更いとす。然れども
幼少よりし。と。鈍と振鉄と舞して。少く道入るりと。云
ハ鳥許あり。更しく侍も。君の釣命めどす。う。諸賢は朝
りと願り見ず。効ひ得る。一藝と。中眼ハ觸人免させ給へ。云
より早く庭前ふ走り出つ。石と拾う。遙か遠き松ヶ枝ハ投打
ハ手ハ應じて大枝小枝。粉々として地ハ落れ。見。人大小。居
ハ。是更ハ水滸ある。没羽箭張清も。おさ。若らぬ早業。う
と。喝采雲時ハ止ざり。長則朝臣ハ行龍ハ早業と。給美
給ひ。你ハ手練其一藝ゆ。其始終と知。人。因。大切
の僚勤。う。う。べきあり。安。細ハ痛。う。渡

であ。んず。あ。れ。先退けと宣。う。う。行竜ハ
と。ま。う。う。う。其後蒲上大學より。行竜と招。奇。ね。這回の僚
勤。う。う。別回の義ハあ。う。帝當家の名玉と愛給ひ。獻覧あり
んの勅命。然れども。這名玉と。う。帝獻覧あり。愛。返。給
ハ。ね。ハ。必。定。你。ハ。う。う。勅使と欺き。艶色。と。の。近。づ。き。う。う。
名玉と棄。ひ。う。う。密。ハ。我。ハ。逃。と。せ。う。う。是。等。閑。の。更。ハ。あ。う。ず。心
と。小。く。功。と。遂。よ。心。得。う。う。云。渡。せ。べ。紫。它。二。部。ハ。頭。と。め。う。う。
そ。ハ。有。う。う。大。更。の。僚。と。身。薄。い。吾。濟。ハ。命。ぜ。う。う。最。恐。こ。う
更。ハ。あ。ん。然。れ。ども。當。城。中。う。玉。と。棄。ハ。跡。あり。も。盜。賊。あり。と
云。う。の。影。護。ハ。似。う。う。べき。欽。這。義。と。御。賢。慮。あり。ま。わ。う。と。云。ハ

大學點頭。これ等の夏ふつゝめつゝ人。和主も定て知つゝ人當
 城より乾ふ當つゝ。平田と云ふ所あり。是の遠里より遠うつ。此
 地ふつ。杜鵑花あり。其原ハ一振うと。四方へ枝の榮へ一夏都て五
 十餘疊の間。今水魚月の末うと。咲く花へあつれども。悠る大
 木の杜鵑花ハ日の本廣く云ども。佐有べきとのあつゝ。都て
 播磨ふ。越ぶ者。是と愛む。云ふ者あり。此杜鵑花。近代寛政の頃。追は
 木とあつゝ。知く此地ハ風景よく。一構は築山。花。琉花。琉石有て。詠ふ
 盡る夏あり。下ぎぬ人。這地ふ愛ふ。知んや。風雅の雲は上人
 這方より。もつゝめつゝ。つゝ。余所眼ふ見
 得手ふ帆ありと。彼所へ行ん。必定あり。其
 詞と廻

近付寄く。棄ひと。密ふ當城へ逃入よ。討手の
 其時。つゝ。汝が手練し。礫と。敵と討跡。我
 勅使比良石中納言殿へ。佐より。盗賊と云々。賄賂と入
 朝庭の首尾と。たのま。金銀。迷う。執成。て。ハ。必定。這是。大夏
 の所あり。かまへ。誤り。無や。ハ。心得。て。手。ハ。拿。や。ハ。示。す
 言も。最。侵。顔。ハ。良。等。ハ。命。つ。武具。一。領。と。拿。出。させ。紫。它。二。郎
 小。渡。して。云。や。是。這。甲。ハ。恐。も。殿。の。召。改。の。小。具。足。也。是。と。小。藩。ハ
 かく。置。玉。さ。人。首。尾。や。棄。ひ。取。あ。バ。早。疾。身。と。固。め。逃。出。よ。
 那。處。ハ。元。來。坤。の。隅。小。水。門。あり。這。是。より。逃。れ。出。よう。と。夏。遣
 も。あ。説。示。せ。バ。行。電。ハ。心。の。内。ハ。彼。自。手。盛。と。喰。放。這。鄙。語。ハ。云。盜

東西の番とさうぐさし。嗚呼拙いかあど独り笑。好くてもあす
べき。甲迫借人と云ふ。真ふ不測の好幸か。と喜び勇んで大學
へ懇懇に辭謝と伸甲と持て退去り。後三日ぐさしをきて
前觸の使臣來り。其趣を來る文月三日の勅使のよ。下
向あり。この人有り猛可おわね。国主此義と心得らま。と
最嚴ふ伸かま。そが儘ふ歸り。長則朝臣へ慇と問より
長臣等と相議して。蒲上大學と響應使とあり。名玉ハ豫てよ
り。名古十郎とゆ。番衆とせられ。途中誤りあき様
の勅使ふ遞とて入き。其後ふ人と国の境に。路次嚴
ふ警固せ。道の左右ふハ都て是巴力定
る幕と絶

間かひ。打。其准構最堅峻あり。さても文月初三日勅
使比良石中納言治長卿。御供廻り僅十人計り。警畢の戸嚴り
御轎み入城ある。是と見んとて集ひ。老若男女數千人。
さ。のに廣き三木の城下も。所狹迫群衆も。本丸の正殿あり。国
主播磨守長則朝臣家の老臣左右ふ。とぞ抵頭して待給へ。バ
中納言治長卿を関より輿駕と下り。最後ふ通らせ給ふ。長
則朝臣やさうや。御勅使ふハ遠路の所。御苦勞千萬。あま通ら
せ給ふべし。最懇懇に述べらる。中納言治長卿ハ点頭して
上座あり。五疊臺ハ座。給ひ。何れも懇懇あり。出迎太義と宣ハ
され。這方より茶童ハ早く。持出る茶の加減より。器ハ是金

銀珠玉と鑲くさ。正ただ是これ柏梁臺はくりやうたいの耳露みみしろあり。勅使ちうしの密ひそに御ご朝あそ庭ていより。詔みこと令のたまひの趣おもきと。仰おほせ聞きちを給たまひ。と云いひ。勅使ちうしハ打うち向むかひ尊そんくも
 賢さきしく。吞のく于や給たまへば長則あがのり朝臣あそみんハ。やゆ。勅使ちうしハ打うち向むかひ尊そんくも
 朝庭あそていより。詔みこと令のたまひの趣おもきと。仰おほせ聞きちを給たまひ。と云いひ。勅使ちうしハ打うち向むかひ尊そんくも
 ちく笑え。やよ長則あがのり慥さハ聞きね。勅使ちうしの趣おもき別義べつぎハあり。守し國こく守し近きん
 頃ころ當あた國こくある。天神山てんじんさんうて得える所の夜光やこうの玉たまあり。や聞きり帝てい
 敵てき見みは。まさん。と。詔みことして得える。給たまふ早々ささハ。通とほずさる。と
 敵てき慮りょと安やすん。給たまふ。と。驚おどろ舌ぜつハ。振ふる。最さい徐じょハ。述しよる。と。り。り

近世
 雲晴間雙玉傳第一集卷之四
 新話

高橋
 歸部

かんのもめ



宮田南北みやだなんぽくを下した

二ノ名マデニヤアタ

